

## 腎虚に対するコラボレーション(その2)

中醫堂

後藤学園中医学研究所客員研究員

関口 善太

本連載は、漢方薬と鍼灸治療のコラボレーションをテーマとして、「鍼薬同効」の応用について考察するものである。第1回の組み合わせの総論に続いて、前回より腎虚に対する具体的なコラボレーションを取り上げている。

今回は腎陰虚に対するコラボレーションを紹介するが、最初に第1回と前回のポイントを記したので、これも参考にしていただきたい。

### ●第1回のポイント：コラボレーションの基本的な組み合わせ方

- |     |                                   |
|-----|-----------------------------------|
| 併用① | 恒常的に鍼灸と漢方を併用するが、鍼灸が中心で漢方薬を補佐とするもの |
| 併用② | 恒常的に鍼灸と漢方を併用するが、漢方薬が中心で鍼灸を補佐とするもの |
| 併用③ | 複数の疾患を抱える患者に、鍼灸と漢方を別々の疾患に対応させるもの  |
| 転換① | 鍼灸治療から漢方薬の服用に転換するもの               |
| 転換② | 漢方薬の服用から鍼灸治療に転換するもの               |

### ●前回のポイント：補腎に用いる漢方方剤の処方構成からみた2大分類

補腎の漢方方剤は補陰と補陽のグループ分け以外に、処方構成からも大きく2つに分類できる。1つ目のグループは、六味地黄丸の処方構成である「三補三瀉」を基準にしたもので、その代表が六味地黄丸と八味地黄丸である。もう1つのグループは、三瀉を捨て填精益髄の中薬を配合したもので、その代表が左帰丸（または左帰飲）と右帰丸（または右帰飲）である。

「三瀉」には利湿薬が含まれるため、六味地黄丸・八味地黄丸は泌尿器の失調が主訴の場合に使いやすく、填精益髄を強化した左帰丸・右帰丸は生殖器や中枢などの失調が主訴の場合に効果的である。しかし日本では左帰丸（左帰飲）・右帰丸（右帰飲）を製剤化されていないため、それらが有効な疾患に対しては、漢方薬と鍼灸治療をコラボレーションさせる意義は大きい。

### 補腎に用いる方剤および漢方製剤と鍼灸のコラボレーション(前回からの続き)

#### 4. 腎陰虚に用いる鍼灸処方と相応する漢方方剤

##### 1) 腎虚に用いられる基本的な鍼灸処方

表をみると、腎陰虚に用いる鍼灸処方は、復

表

病証	鍼灸処方	李家鍼灸処方の処方名	漢方方剤
腎陰虚			六味地黄丸
	復溜・太溪（補）		左帰飲（左帰丸）
肺腎陰虚	復溜・太溪・気海（補）	都気方	都気丸（麦味地黄丸）
心腎不交	復溜・三陰交（補），神門（瀉）	清心滋陰血方	天王補心丹
	復溜（補），神門（瀉）		黄連阿膠湯

注：鍼灸処方のうち処方名が付いているものは『李家鍼灸処方学』に掲載された処方であるが、処方名のないものは『臨床経穴学』に配穴として載っている処方である。また、左帰丸は両書籍に記載されていないが左帰飲と同様と考えて併記した。

溜を基本にして、それと他穴との組み合わせで構成されていることがわかる。しかし、前回の経穴の相互比較のなかでは、腎気と腎陰のどちらに対しても有効性が高い経穴は腎経の原穴である太溪（補）だと紹介した。それを理解したうえで腎虚に用いる鍼灸処方全体をまとめると、太溪を中心にして、腎陰虚には復溜（補）を配穴し、腎陽虚には関元（補または灸補）を配穴するというのが基本路線となる。

今回は腎陽虚に対するコラボレーションは紹介しないが、次回紹介する際に重要な内容となるので、忘れずに参照していただきたい。

## 2) 腎陰虚に用いられる鍼灸処方と漢方方剤の比較（※漢方方剤の組成は前回は参照）

まず、表を見ると、腎虚の方剤の基本形となっている六味地黄丸の類似処方がないことに驚く。しかし、それこそが鍼灸処方の利点を物語るものである。六味地黄丸は、腎の陰精を滋補する熟地黄や山薬が粘膩性であるために、茯苓や沢瀉などの利湿薬を配合した「三瀉」を用いて湿滯を予防している。しかし、鍼灸で太溪や復溜に補法を施した場合、腎の陰精を滋補するが、熟地黄や山薬とは異なり湿滯を心配する必要がない。そのため、利湿する経穴をあえて配穴する必要はなくなる。太溪（補）と復溜（補）を配穴する処方、左帰飲に類似するとされるが、左帰飲の組成中の補薬は、六味地黄丸の「三補」

に枸杞子を加えただけである。そのため、この処方は、泌尿器疾患に用いる場合以外であれば、六味地黄丸にも類似していると考えてよい。

このことは、太溪・復溜（補）に気海（補）を配穴した都気方をみてもわかる。都気丸は六味地黄丸に五味子を加えて納気作用を強化したもので、肺腎陰虚に用いるが（日本ではさらに麦門冬を加えた麦味地黄丸が一般用の製剤にある）、五味子の役割が気海（補）だとすると、六味地黄丸の部分が太溪・復溜（補）ということになる。

なお、六味地黄丸に枸杞子と菊花を加えた杞菊地黄丸については、滋補腎陰・養肝明目に働くため、類似する鍼灸処方としては「復溜・三陰交（補），風池または太陽（瀉）」が似つかわしい。

次に、心腎不交に用いる処方であるが、一般用で製剤化されたものに天王補心丹と黄連阿膠湯がある。後者は不眠に繁用されるが、清虚熱剤に分類され清心に重点を置く処方構成になっており、それと類似とされるのが神門（瀉）と復溜（補）の配穴である。これに対して前者は養補陰血と養心安神のための中薬を多く含んだ処方構成になっており、類似とされる清心滋陰血方では、神門・復溜に三陰交（補）を加えることで、その違いに対応するようにしてある。

## 3) 漢方製剤と鍼灸のコラボレーション

一般に腎虚に関係する疾病には、泌尿器疾患・生殖器疾患・発育遅延や早老・骨髄や髄海（中枢）に関連する疾患、および腰下肢の慢性痛や萎軟などがある。このうち患者側から鍼灸の対応疾患だと認識されているものが腰下肢の慢性痛や萎軟を主訴とする場合であり、それ以外では漢方薬を選択する可能性が高い。

次に、漢方方剤の処方構成上「三補三瀉」を用いた六味地黄丸と、三瀉を捨ててより填精益髓を強化した左帰丸・左帰飲とを、上記の疾病に対する有効性について比較してみると、泌尿器疾患では六味地黄丸が優れ、それ以外では左帰丸・左帰飲が優れているということになる。

そこで、上記の疾病を腰下肢の慢性痛や萎軟を主訴とする疾患・泌尿器疾患・それ以外の疾病の3つに分けて、筆者が行っている漢方製剤と鍼灸のコラボレーションを紹介する。

#### (1) 腰下肢の慢性痛や萎軟を主訴とする疾患

運動器疾患にも分類できるため、鍼灸が中心で漢方薬を補佐とする併用①のパターンでコラボレーションすることが多い。鍼灸治療を高頻度で受ける患者では、併用①の必要性は少ないが、仕事などで時間が取れないために頻繁には受療できない患者には、平素の漢方薬服用で下支えしたほうが効果も持続しやすくなる。ただし、高頻度で受療する患者でも、症状が軽減した後の再発予防では、鍼灸治療から漢方薬に切り替える転換①を行うことが好ましい。

##### ①鍼灸処方

左帰飲と類似とされる復溜・太溪（補）に、腰痛なら腎兪（補）、膝痛なら曲泉（補）を配穴し、疼痛が強ければ部位に合わせて腰眼・環跳・委中・阿是穴などから選択して瀉法を施す。

##### ②漢方製剤

左帰丸（左帰飲）と六味地黄丸を比較すれば左帰丸のほうがよいが、鍼灸で疼痛部の通絡を行っているため、滋補肝腎をサポートできるのでさえあればよい。そこで、処方箋で服用する医療用では六味地黄丸を使用する。市販の一

般用であれば亀鹿二仙膠を六味地黄丸に合方して左帰丸に近付けたものにした。また、このとき虚火が強ければ六味地黄丸を知柏地黄丸に変更し、随伴症状に眼精疲労などの眼病がある場合は杞菊地黄丸に変更するとよい。なお、腎陽虚であれば養血壮筋健歩丸や独活寄生湯を使うとよいが、腎陰虚に使用すると配合されている温陽の生薬によって虚火が強まる可能性もあるため注意が必要である。

#### (2) 泌尿器疾患

現状では、漢方薬による治療がほとんどであるため、コラボレーションする場合はおもに併用②のパターンとなり、漢方から鍼灸へ置換する場面もあまりない。

##### ①漢方製剤

六味地黄丸を基本に使用するが、腎陰虚に用いる製剤には、医療用・一般用を問わず、腎陽虚に用いる「牛車腎気丸」（八味地黄丸に牛膝と車前子を加えて通利の作用を強化したもの）のようなものはない。また、激しい頻尿や失禁には、縮尿や固渋の作用をもつ中薬を配伍して、膀胱の約束機能を改善させるとよいのだが、やはり製剤では難しい。そこで、こうした作用を強めるためには、鍼灸の併用を考えるとよい。

##### ②鍼灸処方

腎陰虚に用いる処方であるため、左帰飲と類似とされる復溜・太溪（補）を基本とするが、尿閉ぎみのものに通利の作用を強化する場合は、牛車腎気丸における牛膝・車前子の役割をする中極（瀉）を配穴する。逆に縮尿や固渋を強化したい場合は、合谷（補）を配穴して益気固渋をはかるとよい（次回紹介する合谷・太溪（補）による益気補腎を参照）。漢方製剤とコラボレーションする際には、漢方の作用が及びにくい部分がポイントとなるため、この中極や合谷が重要になる。

### (3) その他の疾患（生殖器疾患・発育遅延や早老・骨髄や髄海＝中枢に関連する疾患など）

これらの疾患も泌尿器疾患と同様で、現状では漢方薬による治療がほとんどであるため、コラボレーションする場合は併用②のパターンが中心となる。ただし、近年では、不妊治療に鍼灸を用いるケースも増えてつあるので、その場合は併用①のパターンになることがある。

#### ①漢方製剤

左帰丸と六味地黄丸を比較すれば左帰丸のほうが圧倒的によいが、処方箋で服用する医療用漢方では選択の余地がないため六味地黄丸を使用する。一般用であれば亀鹿二仙膠を六味地黄丸に合方して左帰丸に近付けたものがよい（知柏地黄丸や杞菊地黄丸への変更は（1）の②を参照）。しかし、局所や関連する経絡へのアプローチが足りないことで効果が上がりにくい場合も多く、そうした際には併用②のパターンで鍼灸治療をコラボレーションするとよい。

なお、肝腎陰虚に気鬱が加わった病証に用いる一貫煎も日本では製剤化されていないが、近年では老人性のうつ病なども増えており、製剤があれば使いたいものの一つである。血燥が軽度であれば柴胡剤を六味地黄丸と合方して用いることもできるが、柴胡は解表薬に分類されるように燥性が強いので、血燥が激しい場合は用いることができない。その際は、鍼灸を併用②のパターンでコラボレーションさせて、六味地黄丸（市販の場合は杞菊地黄丸）に、太衝や内関などへの瀉法を施すとよい。

#### ②鍼灸処方

腎陰虚に用いる処方であるため、左帰飲と類似とされる復溜・太溪（補）を基本とするが、それぞれの疾患に応じて、局所や関連する経絡へアプローチできる経穴を配穴するとよい。たとえば婦人科疾患であれば子宮穴や任脈上の関元、骨髄疾患であれば骨会（大杼）や髄会（絶骨）、中枢の疾患であれば頭部にある百会や四神聡などがあげられる。漢方製剤とコラボレーションする際には、漢方の作用が及びにくい部

分がポイントとなるため、これらの局所への取穴が重要になる。

### (4) 症例紹介

患者：女性、64歳、160cm、60kg、専業主婦。

主訴：陰部痛と頻尿（西洋医学的診断：間質性膀胱）

初診日：●●●

現病歴：8年前に、陰部に不快を感じ始め、その2年後には痛みが変わり、昼夜を問わず頻尿となる。泌尿器科・婦人科を数カ所回った結果、某大学病院で間質性膀胱により膀胱内に潰瘍ができていた（潰瘍からの出血もある）との診断を受けた。治療はレーザーで潰瘍部を焼くというものであるが、手術を受けても半年足らずで痛みが強まり、1年ほどすると激痛になるため、また手術を受けるというパターンを毎年繰り返してきた。

2016年10月にも再手術を受け、現在術後2週目になるが、このままでは同じことの繰り返しになるだけであると考え、東洋医学の受療を希望した。

現症：小便頻数で昼夜を問わず1時間から1時間半ごとにトイレに行く（病院からは、膀胱の容量が100cc程度しかないと説明を受けている）。気温や天候の影響はない。手術直後のため、まだ痛みはあまりなく、1日に数回、排尿時にわずかな痛みを感じる程度である。尿の色は黄色みが濃い。

手術前は、膀胱に尿が溜まってくると痛みが増悪し、それ以外に香辛料などの刺激物の飲食も増悪因子であった。

随伴症状：手足の冷えはない。3年前より足先にしびれがあり、脊柱管狭窄症との診断で月に1回ブロック注射を受けている。右脈やや弦、左脈細やや数、舌質紅、有裂紋、舌苔薄中央剝落。

弁証：膀胱実熱と腎陰虚の虚実挟雑

激痛時は膀胱実熱証が主体の血淋に近く、術後の現在は腎陰虚が主体で勞淋に近い。

治則：標本同治（ただし現段階においては治本

を主体にする)

治法：滋補腎陰・通利膀胱

鍼灸処方：復溜・太溪（補），中極（瀉）

（このほか脊柱管狭窄症に対して腰下肢に取穴しているが，ここでは割愛する）

漢方製剤：知柏地黄丸

本患者は，筆者が主催する研究会に所属する鍼灸師の治療院で鍼灸治療を始めたが，本人の希望で漢方薬を併用することになり，併用①のパターンで治療を行っている。鍼灸治療を主体に考えると，週1回程度の治療では，滋補腎陰の力が弱いため，漢方薬での下支えが求められる。逆に漢方製剤による治療からみると，前述の牛車腎気丸のように，牛膝・車前子で通利を強化した六味地黄丸の附方がないため，中極の瀉法をコラボレーションできる意義は大きい。

経過：現在術後5カ月目であるが，前回の手術後5カ月目と比較すると痛みの程度はかなり軽い。また，採尿すると130cc～150cc以上あり，頻尿の程度も軽減している。

考察

鍼灸治療を単独で行う場合と，漢方薬とコラ

ボレーションする場合には，経穴への操作に若干の違いがあると考えている。上述の治則で治本を主体にするとしているが，コラボレーションの場合の鍼灸治療では，中極の瀉法（治標）に力点を置くようにしている。漢方薬を含めた治療全体からみれば，治本が主体となっているが，鍼灸に求められるのが通利膀胱だからである。しかし，鍼灸単独の場合では，瀉法が強すぎると正気を損ねることが懸念されるため，思い切った瀉法は避けて，治本に対する補法を重んじざるを得ない。

このように扶正祛邪をする際に，漢方薬で扶正を下支えすることで，鍼灸で局所などへの瀉法を思い切ることができるようになる点も，コラボレーションすることの利点であると考えられる。

今回は，腎虚に対するコラボレーションの最終回として，腎陽虚をテーマにしたものを紹介する予定である。

（つづく）